

名詞の後置修飾として機能する前置詞 at 句の特徴について

田尾俊輔

1. はじめに

前置詞の使用において、on は平面との接触、in は空間の境界が意識されるが、at は場所を抽象的に指定する(田中, 1997)。このように「色がついていない」at が、他の語句を修飾する動機は何であるのかを探ることは、at の意味の記述・説明においてはもちろんのこと、前置詞全体の意味体系を考える上でも重要である。前置詞という名を冠しているものの、事象とその場所や時間等の情報を結びつける役割を担っていることも踏まえ、本稿では名詞に後続する前置詞 at 句にはどのような特徴が見られるのかを検討する。具体的な文例としては、例えば(1)や(2)に挙げるものである(以下、文例中の下線やイタリックは筆者による)。

- (1) He is *a professor of English literature at* Yale University. (ジーニアス英和大辞典)
- (2) *Regular attendance at* the English class is compulsory for all the students. (*ibid.*)

2. 前置詞 at 句で後置修飾が可能な名詞に関する先行研究

名詞を後置修飾する前置詞の一般的な特徴として、(3)のように、他動詞由来の派生名詞は of を伴うという傾向がある(小川, 1997)。

- (3) a. destruction of NP (< destroy NP) (小川, 1997)
- b. indication of NP (< indicate NP) (*ibid.*)
- c. inclusion of NP (< include NP) (*ibid.*)

ただし、(4)の通り、例外も存在する。

- (4) a. resemblance to NP (< resemble NP) (小川, 1997)
- b. attack on NP (< attack NP) (*ibid.*)
- c. entrance into NP (< enter NP) (*ibid.*)

また、名詞の派生元となっている動詞や形容詞がある場合、これらの動詞や形容詞が伴い得る前置詞を派生名詞も同様に伴う傾向があるということも指摘されている(小川, 1997)。(5)のような例である。

- (5) a. agreement with NP (< agree with NP) (小川, 1997)
- b. attendance at NP (< attend (at) NP) (*ibid.*)
- c. amazement at NP (< be amazed at NP) (*ibid.*)
- d. anger at NP (< be angry at NP) (*ibid.*)

そして、(6)のように、対応関係にある動詞や形容詞の形式がない場合は、類似の意味を持つ名詞に後続する前置詞と同じになるという傾向もある(小川, 1997)。

- (6) attempt at NP, effort at NP, endeavor at NP, try at NP (小川, 1997)

上の(5)や(6)によって示唆される、派生元の形や類似する表現で at が使われるために、当該の名詞でも at で後置修飾できるという説明には納得がいく点もある一方で、なぜこれらの名詞で at が使用されるのかという根本的、意味的理由を説明したことにはなっていない。

3. 前置詞 at が表す「点」に関する先行研究

前置詞 at の意味的な分析として、その中心的な意味に「点」があるというのは多くの研究で指摘されている。例えば、Herskovits (1986) では“for a point to coincide with another”と、Tyler & Evans (2003) では“co-location between a TR [trajector] and a LM [landmark]”と説明されている。

しかしながら、奥野 (2023) は Herskovits (1986) で挙げられている文例を再考し、(7)のように「点」と認識するのが困難な事例も一定数存在すると述べる。表面や線状のものを点とみなせるのか、というのが大きな問題である。

- (7) a. There are bubbles at the surface of the water. (奥野, 2023; cited from Herskovits (1986))
- b. Are the days at the equator always 12 hours long? (*ibid.*)
- c. The grass is highest at the fence. (*ibid.*)
- d. The gas station is at the freeway. (*ibid.*)

また、奥野 (2023) は、「点」の概念は from や to といった他の前置詞でも見られることから、at を説明するために専売特許的に使ってよい概念なのかという疑問も呈している。

そこで奥野 (2023) は、at は「全体空間の中で TR が占める位置を LM によって位置指定する」前置詞であると定義し、上の(7)について、水のどの位置に泡があるか、地表のどの部分の昼間を指しているか、といった説明を展開している。

奥野 (2023) による上記の定義は、従来の「点」の説明では例外として捉えられてしまいかねない(7)をうまく説明できるという点で興味深いですが、どのような全体空間が具体的に想定されるのかということについては議論を深める必要がある。そうしなければ、極論として、どんなものでも全体空間と言ってしまう可能性があるからである。本稿では、特に名詞に後続する at 句による全体空間を検討することとなる。

4. コーパス調査による具体事例の観察

The Corpus of Contemporary American English (COCA) を用い、①[名詞 at a 名詞]、②[名詞 at the 名詞]、③[名詞 at 名詞]の3パターンで、名詞に後置修飾する at 句の実例を検索した。③は現状として特筆すべき特徴が見られなかったため、ここでは①と②を取り上げ、それぞれ表1と表2としてまとめた(田尾 (2024) に基づき作成)。

表1: [名詞 at a 名詞]の実例 (COCA 検索上位 10 位)

	名詞 at a 名詞	COCA での用例数
1	day at a time	1,050
2	step at a time	837
3	hours at a time	624
4	months at a time	517
5	days at a time	472
6	weeks at a time	455
7	thing at a time	412
8	minutes at a time	371
9	person at a time	240
10	years at a time	193

表2: [名詞 at the 名詞]の実例 (COCA 検索上位 10 位)

	名詞 at the 名詞	COCA での用例数
1	professor at the university	2,451
2	researchers at the university	781
3	light at the end (light at the end of tunnel など)	763
4	student at the university	707
5	studies at the university	704
6	knock at the door	550
7	science at the university	490
8	seat at the table	464
9	program at the university	461
10	students at the university	446

表1のように、名詞句に後続する at a NP ([名詞 at a 名詞]) については X at a time がほとんどを占めており、X よりも長い時間が想定され、そのうちの一部分の時間として X が指定されると考えられる。また、表2の通り、名詞句に後続する at the NP ([名詞 at the 名詞]) については X at the university が多く、日常生活では多様な役割が想定されるが、その中でも特定の大学での役割として professor や researcher(s)、student(s)等が指定されるといえる^{註1}。

5. 本稿のまとめと今後の課題

4 節で確認した内容を踏まえると、本稿冒頭で示した(1)と(2)にも同様の説明を与えることが可能である。(1)はすでに4 節で言及しているため、(2)のみを取り上げると、学生生活全体の時間を想定し、at 句によりその一部分の英語の授業時間が導入され、そこでの出席が同定されると考えることができる。

本稿では奥野 (2023) の定義を精緻化することで、名詞に後続する前置詞 at 句の特徴を考えてきた。at は場所や時間を指し示すことができるが、それは全体空間を想定することが前提として求められており、名詞に後続する前置詞 at 句においてもそれが継承されているようである。1 節で触れた in や on などの「色がついた」前置詞では、全体空間を想定することは可能かもしれないが、そもそも想定する必要がないと思われる。そのあたりの事情については、今後、前置詞間の比較を通して突き詰める必要がある。

(註1) 日本英文学会第96回大会での研究発表時の質疑応答にて、at は一時的な所属を表しているというご指摘をいただいた。これについても、人生を全体として考えた時に、その大学ではどのような職を担っているのかということに言及し、将来的に別の大学に異動する可能性も含まれた言語表現になっていると説明できる。

Selected References

- Herskovits, A. (1986) *Language and Spatial Cognition: An Interdisciplinary Study of the Prepositions in English*. Cambridge University Press. / 小川明 (1997) 「意味から見た派生名詞の前置詞」『東京家政大学研究紀要』37(1), 223-228. / 奥野忠徳 (2023) 『英語前置詞の意味を解き明かす』開拓社. / 田中茂範 (1997) 「日本語空間表現の特徴: 日英語比較の可能性」田中茂範・松本曜『日英語比較選書6 空間と移動の表現』, 4-62, 研究社. / 田尾俊輔 (2024) 「英語前置詞 at が<場所>を表すのはどのような場合か」、DH 若手の会「デジタル・ヒューマニティーズで“繋がる×広がる”人文学」(於: 一橋大学、ポスター発表資料) / Tyler, A. & V. Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge University Press.